

8 谷野一栢著『難經抄』

所引医書について

宮川浩也

わが国の『難經』注釈書の中で最古と目される谷野一栢の『難經抄』の引用医書について報告する。『難經抄』は熊宗立の『新刊勿聽子俗解八十一難經』を注釈したもので、『難經』の「經」・『俗解難經』の「注」に対する「疏」である。熊宗立がいかに尊崇されていたかが窺われる。戦国大名の朝倉孝景（一五二一～一五四八）の招きで谷野一栢（生卒未詳）は享祿二年（一五二九）以前に越前一乗谷に移り住んでいる。今回調査した『難經抄』は、永正六年（一五〇九）頃に和泉において執筆され、享祿二年（一五二九）に一乗谷に移り住んでから補正したテキストで、一栢の養嗣の三崎家所蔵書である。引用医書を右に示す。

素問

靈樞

傷寒論

集注難經 五卷 宋・王翰林集注

補注難經 五卷 宋・丁徳用著

証類本草 三十卷 宋・唐慎微撰

医説 十卷 宋・張杲著

泰定養生主論 十六卷 元・王珪著

医方大成論 十卷 元・孫允賢撰

奇効良方 六十九卷 明・方賢撰

医書大全 二十四卷 明・熊宗立撰

これらはいずれも一栢と親交のあつた月舟寿桂の『史記』附標所引医書の範疇に入るものである。この中から特徴的な医書について触れる。

①素問・靈樞

「卷之二靈蘭秘典論」「卷之三三部九候論」「卷之四五十營」と引用箇所を明らかにし、あるいは「右見素問靈樞集注卷之四脈度第十七云」の小題からみて十二卷本系統のテキスト、時代的情況からいえば熊宗立本に依拠していたものと考えられる。

②集注難經

『王翰林集注難經』の現行本の祖本は慶安五年（一六五二）刊本であるが、一栢の拠ったのはそれを一三〇年以上もさかのぼるテキストで、当時すでに明刊本が渡来していたものと考えられる。これによって月舟寿桂も『王翰林集注難經』を用いて『史記』に注していたことが確実となった。

③補注難經

佚書であるが、『集注難經』にその注文が集められている。すべて二十五回の引用があり、一箇所だけに「丁徳用補注難經」（二十二裏）とあるのみで、他の引用は「補注」としか書かれていない。『集注難經』所収文と照らしてみると、「丁徳用補注難經」の部分は確かに丁徳用注文であるが、「補注」と引かれる注文は丁徳用のみならず楊玄操・虞庶の注文に相当するから、「補注」は「集注」の誤りと考えられる。

このほか「紀氏」（七十五表）「紀天錯」（七十六裏）の名も見えるが、これは熊宗立注所引の紀天錫注に相当し、紀天錫注本から直接引用したものではないだろう。

なお、『難經抄』には、書体・墨色からみて本文とは別の者の細字注が加えられている。「延寿院之講義也」（見返し裏）「東井曰（二六裏他）」「朔曰（二六裏）」といい、曲直瀬玄朔（二五四九〜一六三一）の言を引いているから、玄朔の『難經』の講義を受けた者が、再稿が成った後のテキストに細注を施したものと考えられる。また「寿徳庵（六三裏）」つまり曲直瀬玄由（一六四四）の名も見える。したがって、今回の調査の対象からはずした。

（北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部）